

明日 への 話題

アジアと共に 歩む



前金融庁長官

はた なか りゅう た ろう
畑中 龍太郎

最近よく「アジアの成長を取り込む」という言葉を耳にする。方向性や重要性はその通りなのだが、どこかその“重商主義的(収奪的)”な響きに戸惑いを覚える。心の深い部分において、「アジアの国々やその国民と共に歩む(在る)」という心持ちを忘れてはならないと思う。好調な時も不調な環境下でも、相手国(民)の考えを最大限尊重し共に悩みながら、長期的観点からの自立的発展に繋がる貢献を、忍耐強く続けていく姿勢が求められよう。そして、彼等が更に発展していく中において、我々自身アジアを鏡とし自らを磨いていくことが必要なのではないか。

今ミャンマーでは、日緬の官民がスクラムを組み、本年中の取引所開業を目指し大車輪で取組みが進められている。しかし、開業に漕ぎ着けるための支援は単なる始まりに過ぎない。大事なことは、この重要な経済インフラをミャンマーの人達が自らの力で運営し、アジアを代表する取引所に育て上げていく、そうした努力を、何年掛かろうとも粘り強く支援していくことだと思っている。本件でもまた、「共に歩む」覚悟が試されている。

アジア新興諸国の金融面の国造りを支援しようと金融技術協力を働き掛けた際、どの国の当局も予想以上の積極性を見せた。様々な動機や背景があるのだろうが、根っこには、国の経営や経済運営を自前で行い得るレベルにまで到達したという現実がある。どの国も、“直輸入”や“押着せ”ではなく、自国に相応しい法的枠組みや制度運営を必死で模索している。そうした中、最も重要でしかし厄介なテーマがシップの舵を握る運営者の人材育成だろう。金融庁のAFPAC(アジア金融連携センター)では、昨年7月以降、アジア諸国の金融当局から将来の幹部候補生を概ね4ヶ月程度受け入れ、各人毎にオーダーメイドの実務研修を行い、日常生活の世話も含め職員が手分けしてサポートしている。仮に、年間延べ30人を受け入れ、10年間情熱を持ってこのプログラムを継続すれば、必ずやその人達は、母国を支える人材として育ち、又300人に上る得難き人脈となつていよう。こうした「人材面での国造り」支援が強く求められている今、それに全力で応えることは、アジアの一員である我々の責務だと思う。

昔、「30年後50年後、アジアの国々は日中のどちらにより軸足を置くようになっていくか、その決め手は何か」と問われたことがある。恐らくは、様々な分野における国造りの面で、いずれがより有益な「ソフトパワー」を提供できるかで決まるのではないか。長年に亘る先人達の貢献、日本が培ってきた実践的な知見やノウハウ、そして今後の中長期的なコミットメント等があれば、「ソフトパワー」で中国の後塵を拝することは無いと考えている。